

4月に始まったナロジチ再生・菜の花プロジェクトは、順調に進んでいる。21年間荒野だったナロジチの汚染地に2ヘクタールの菜の花畑が出現した。規模は小さいが、未来を開く一歩になればと期待は膨らむ。8月にはナタネを収穫し、秋蒔きナタネ2haの播種も無事すんだ。来年のバイオエネルギー・プラント建設に向けて、準備が進んでいる。

### ● 菜の花プロジェクトに関わる現地の人々

現地でナタネの栽培と研究に携わっているのは、国立ジトーミル農業生態学大学のディードフ教授（放射線生物学）とその仲間の研究者らである。ニコライさんは栽培担当の農業技師、モーシャルさんは分析用サンプルの採取と調整、ピタリーさんは放射能の測定を行う技師でプログラマーである。実験助手のザスチュパスさんは分析用ナタネの調整係り、ミニアールさんは土壌サンプルの調整担当、ブルラックさんは土壌やナタネの化学分析担当、などである。春蒔きナタネと秋蒔きナタネ、土壌をあわせると分析用サンプルは約800検体にも及ぶ膨大な数である。これらの人々が手分けし、あるいは協力して現場に赴き、栽培や分析を行う。ナロジチ地区で畑の耕作や種まき、農薬散布など栽培の具体的な作業を行うのは、汚染地域土壌管理ステーションの、ネステルチュク所長と農業技師のコロミエツさんその他の職員（人数？）である。そして、全体の事務連絡や管理を担うのはナロジチ地区議会副議長のプロコペンコ氏、全体の総監督はサブリュク、ナロジチ地区行政長である。また、このプロジェクトの資金管理は、従来から我々と緊密なパートナーであるチェルノブイリ・ホステージ基金のキリチャンスキーさん、ドンチェヴァさんの二人。こうして大勢の協力の下、菜の花PJは船出した。我々を含め、関係する6つの組織、団体の間にはそれぞれの役割を明記した契約書が結ばれ、5ヵ年計画の目標が掲げられた。

### ● 春蒔きナタネの収穫

4月に蒔いたナタネは、播種後に雪が降ったり生育期に日照りが続いて成長が心配された

が、現地の人々の上手な管理で順調に成長し、8月はじめに収穫が行われた。当初虫害なども有り1ヘクタール（ha）当り1トン程度と考えられた菜種の収量は、肥料条件で異なるが、最適条件では1.7トンあり予想以上の収量であった。ナタネは肥沃な土地では2～3トンの収量があることがわかっており、それから見れば少ないが、この地域の土壌が強い酸性（PH3～5）の悪条件であることを考慮すれば上出来である。バイオマスの量は1ha当り5.7トンであった。種子とバイオマスはそれぞれ前述の汚染地域土壌管理ステーションに保管され、バイオエネルギーへの転換を待っている。

### ● 放射能の吸収と肥料条件

ナタネの種子やバイオマスの放射能分析はほぼ終わり、現在土壌の分析が行われている。部分的なデータからその一端を紹介する。セシウム137はカリウムと類似の性質を持つことから、カリ肥料は吸収を抑制すると予想されたが、結果は予想通りであった。種子への吸収量は、窒素とリン酸肥料だけの肥料区では種子1Kg当り683ベクレル（Bq）だが、カリ肥料を与えた区では490Bqに下がった。こうした分析は秋蒔き菜種でも行われる。この研究で初めて分かったこともある。ナタネの部位別にセシウムを分析すると、茎や莢などのバイオマスよりも種子に多くのセシウムが吸収され、茎や根などのバイオマス部分には種子の3分の1～4分の1の吸収に留まった。ストロンチウム90は逆に、種子よりもバイオマス部分に多い。こうした基礎的なデータを蓄積しながら、次年度以降の計画、即ちナロジチでのバイオエネルギー・センター建設に取り掛かる。（河田）